



Data

監督：ジャン・ルノワール
脚本・台詞：ジャン・ルノワール、シャルル・スパーク
出演：ジャン・ギャバン／エリッヒ・フォン・シュトロハイム
／ピエール・フレネー／マルセル・ダリオ／ディタ・パル
□

■□ショートコメント□■

◆中学時代から映画が大好きだった私は、映画監督ジャン・ルノワールの名前は知っていたが、本作を始めとする彼の代表作は観たことがなかった。また、映画俳優ジャン・ギャバンの名前は知っていたし、彼がベテラン俳優として出演した『ヘッドライト』(56年)、と『地下室のメロディー』(63年)は観ていたが、1937年公開の本作に彼が主演していたことは全く知らなかった。

また、本作にはウディ・アレンが「知的な映画を撮ろうとしているが、『大いなる幻影』の足元にもおよばない。」、オーソン・ウェルズが「後世に残す映画を一つ選ぶとしたら、それは『大いなる幻影』だ。」と最大級の賛辞を捧げていることも全く知らなかった。したがって、そんな名作がデジタル修復版として復活し、鑑賞できたことに感謝!

◆第一次世界大戦におけるフランスとドイツの西部戦線(=塹壕戦)を描いた映画は、エーリヒ・マリア・レマルクの『西部戦線異状なし』を映画化した『西部戦線異状なし』(30年)等、たくさんある。近時の、『戦火の馬』(11年)も素晴らしい映画だった(『シネマ28』98頁)。また、反戦映画の傑作として語り継がれてきた、ジャン・ルノワール監督の不朽の名作たる本作も、第一次世界大戦、ドイツの捕虜収容所を舞台に、自由を求め、脱走を繰り返すフランス人将校たちを描いたもので、国民皆兵の総力戦を戦い、一進一退を繰り返す消耗戦となった第一次世界大戦のなかで、騎士道精神が蘇った将校捕虜収容所の物語だ。

中学時代に当時のハリウッドのオールスターによる『大脱走』(63年)を観て大興奮した私は、本作前半にそれと同じような穴掘りのシーンが登場したのでビックリ!いや、それは逆。本作が、『第十七捕虜収容所』『大脱走』等、その後には作られた脱走を描いた捕虜収容所映画の原点として多大な影響を与えていたわけだ。

◆『大脱走』は捕虜とされた軍人たちの多種多様なキャラ模様とその結集のサマが見どこ

ろだった。それに対して本作の見どころは、捕虜とされたフランス人将校ド・ボワルデュエー大尉（ピエール・フレネー）たちや、捕虜収容所の管理責任者であるドイツ人将校フォン・ラウフェンシュタイン大尉（エリッヒ・フォン・シュトロハイム）たちの「貴族としてのあり方」になる。オードリー・ヘップバーン主演のハリウッド版『戦争と平和』（56年）を観ても、リュドミラ・サベリーエワ主演のロシア版『戦争と平和』（65～67年）を観ても、ロシア人将校たちの貴族性のあり方が際立っていたが、本作でも支配する側か支配される側かを問わず、将校たちの貴族性のあり方に注目！

互いの貴族性を尊重し合う中で、一方は「ゴルフ場ではゴルフ。収容所では脱走だ」と宣言し、他方は「脱走する者は殺さなければならない」と宣言するのだから、双方の対立は明白だし、その衝突は不可避だが・・・。

◆本作後半は、見事脱出に成功したマレシャル中尉（ジャン・ギャバン）とユダヤ人のローゼンタール中尉（マルセル・ダリオ）が、夫も兄弟もことごとく戦争で失った中、幼い娘と2人で暮らすドイツ人女性エルザ（ディタ・パルロ）によって助けられ、マレシャル中尉とエルザが友情を越えた淡い恋模様が発展していくサマが描かれるので、それに注目！日本でも敗戦後、東京に乗り込んできた占領軍の米兵と日本人女性との間に多くの淡い恋が生まれたが、本作のそれは実に心あたたまるものだから、それをしっかり味わいたい。

しかして、身体のキズの癒えたマレシャル中尉と最後まで助け合って脱走を続けてきたローゼンタール中尉の、スイスを超えてフランスへの最後の脱走は成功するのだろうか・・・？

2018（平成30）年5月2日記